

ハイデガー・フォーラム第12回大会

応募発表要旨1

(統一テーマ：ヒューマニズムについて/を越えて)

暴力と人間——レーヴィットからヴェイユへ

本発表が着目するのは、レーヴィットとエリック・ヴェイユ^①という二人の哲学者である。

レーヴィットはハイデガーの『ヒューマニズム書簡』および『形而上学入門』等に登場する「人間」についての議論を批判した。本発表ではレーヴィットによるハイデガー解釈に敢えて異を唱え、さらにヴェイユの思考を接続してみたい。なぜならハイデガーの「人間」論（あるいは「ヒューマニズム」）には、なお考慮に値する論点が残されているように思われるからである。ここでは概略的に二点だけ指摘しておく。

1. 『ヒューマニズム書簡』においてハイデガーは、「人間」を「本質 *Wesen*」とは違う仕方で探究することを目指しつつ、「人間は単なる人間より以上のものである」という規定をすることで、一種の「本質」を提示している。この一見したところ不整合に見えるハイデガーの立論をどう解釈するか。
2. 『形而上学入門』において、ハイデガーは「人間」を「暴力 *Gewalt*」との関連で定義し、「人間」の「本質」を論じていた。この点についてレーヴィットは立ち入って検討を加えていないが、「暴力」と「人間」の関係はハイデガーによる定義とは別に、より一層の探求を必要としているのではないか。

第二の論点には説明が必要であるが、この点を理解するためにはレーヴィットに加え、「暴力」と「人間」の関係を論じたエリック・ヴェイユの思考が参考になる。

ヴェイユの議論に立ち入るに先立って、まずはハイデガーとレーヴィットの関係をこの発表にかかわる範囲で辿っておこう。

レーヴィットによれば、ハイデガーは「ヒューマニズム」に意味を取り戻そうとする試みを「不必要」と見なしている。必要とされるのは人間の本性の探求ではなく、「存在」との関係である (Löwith 180)。ところがレーヴィットによれば、この「存在」は決して経験の対象とはならない。「どんな存在者でもない存在について……どんな意味で経験のようなものが存在することができるのか」 (Löwith 183)。

この点にレーヴィットによるハイデガー批判が存するのであり、「経験」の対象となるか否かが鍵となっている。レーヴィットは「存在」よりも「人間」の「本性 *Natur*」の方が「経験」の対象となると考える。「人間の本性について、現象学的に証明されるような経験が存在する」(Löwith 183)。「本質」の探究と「経験」の重要視は、決して矛盾する試みではないのである(この観点からすれば、ハイデガーの『ヒューマニズム書簡』での記述は矛盾したものではないことがわかる)。

レーヴィットはハイデガーにおいて「人間」が「暴力的現存在 *gewalttätiges Dasein*」として規定されることを明記している。しかしレーヴィットはハイデガーにおける「暴力」と「現存在」あるいは「人間」との関係に立ち入ろうとはしない。「暴力」という事象はレーヴィットの意図以上に、「人間」的なあり方をしているのではないか。レーヴィットが示唆したように、「経験」の対象が重要なのだとしたら、「暴力」という事象はすぐれて「人間」という存在を思考するための有効な方策の一つとなりうるのではないか。

ハイデガーにおいて「暴力」は、「人間」と切り離せないものとされていた。ただし「暴力」は、否定されるべきものという側面も持つはずである⁽²⁾。このような問題意識から発して、本発表ではヴェイユの論考を取り上げる。ヴェイユは「暴力」と「人間」との関係を必然とする。「人間のみが暴力に直面するのであり、人間のみが人間に到来しうるものに直面する」(LP 28)。ただし「人間」は哲学することにおいて、「暴力」を拒否される。「パラドクスの帰結とは、暴力が意味を持つのは哲学にとってのみであるが、哲学とは暴力の拒否である、ということである」(LP 58)。人間の本質を「暴力」としながらも、「人間」はいかにして「暴力」と向き合うのか。この問いは「ヒューマニズム」についての、可能かつ現代的な探求となりうるはずである。

引用文献

Löwith, Karl : *Gesammelte Abhandlungen*, W. Kohlhammer Verlag, 1960.

Weil, Eric (LP): *Logique de la philosophie* [1950], Vrin, 1996.

⁽¹⁾ エリック・ヴェイユはドイツに生まれたユダヤ系哲学者で、のちにフランスに帰化。帰化する以前の名前は“Erich Weil”であった。

⁽²⁾ このような考察においては、*Gewalt* と *Violence* がただちに同義とは限らないことも考慮せねばならない。この点については、谷徹による論考(谷徹「暴力論の基礎考察」、『暴力と人間存在』筑摩書房、二〇〇八年)を参照のこと。

ハイデガー・フォーラム第12回大会

応募発表要旨2

(統一テーマ：ヒューマニズムについて/を越えて)

「ヒューマニズム」を超える思考と行為——ハイデガーとアーレント

ハイデガーによるヒューマニズム批判は、「14、15世紀イタリア・ルネサンス」や「18世紀ヒューマニズム」への批判であり(vgl., GA: 320)、「人間精神の復興」(Comenius: 10)をめざす近代公教育への批判にもなる。また、「すべての存在者が労働の素材として現れる」(GA9: 340)唯物論も、サルトルも、ヒューマニズムに他ならない。これら多様な形態のヒューマニズムの本質は、「主観性の支配」から発生する「あらゆるものの無制約的な対象化」(GA9: 317)であり、その足下に巣食うのは、「近代的人間の故郷喪失」である。ヒューマニズムへのハイデガーの対抗は、「ホマー・フーマーヌスのフーマーニタースを思考する」(GA9: 352)ことであり、ヒューマニズムとは「別の様々な視界を開き」(GA9: 348)、人間としての人間のフーマーニタースに、新たな尊厳を与える挑戦である。それは、ヒューマニズムの表向きの人間礼賛と生産性に隠れた破壊性の暴露と回避を企図している。

ヒューマニズムを克服するのは、「存在の思考」である。この思考は、現実には何ら作用を及ぼさないものの、存在に聞き従いそれを言葉にする「最高の行為」である(vgl., GA9: 313)。こうした行為としての存在の思考は、近代に猛威をふるう「支配と統治」の「代わりとなるもの」(LM2: 178)である。その支配と統治とは、すなわち、「テクノロジーのまさしく本性」であり、「意志する意志」、「世界全体をその支配と統治へと隷属させる(subject)意志」であり、「その自然な結末は、全面的な破壊でしかありえない」(LM2: 178)。

本発表では、ヒューマニズムとテクノロジーに対するハイデガーの対抗の道を、アーレントの行為論から見直し、存在の思考とは異なる新たな対抗的視界を提示したい。

存在の思考で行為しているのが誰かと問うことで、アーレントは存在の思考に新たな光を投じる。その思考は確かに行為であり、行為するのは思考者であるが、この思考者が存在に従っている以上、真に行為しているのは存在、つまり「誰でもない(Nobody)」(LM2: 187)。それゆえ、存在の思考では、行為は三次元に分化する。現れの世界での複数の人々の行為、思考者による存在に聞き従う行為、誰でもない存在の行為である。

アーレントもまた、近代において露呈しはじめた全面的な破壊を危惧し、それへの対抗を考えるが、彼女はハイデガーとは正反対の方向に望みをかける。

第一に、ハイデガーが、現れの世界で行為する人々の背後で行為する存在に救いを見出

したのに対して、アーレントは、現れの世界における人々の行為に活路を見出そうとする。第二に、ハイデガーが、存在の声に聞き従う孤独な思考者に、世界の運命を託したのに対し、アーレントは、共通の現れの世界で相互に語り行為する複数の人々を頼みとする。第三に、危機から救うものが、ハイデガーでは誰でもないのに対し、アーレントでは、公的な活動と言論において自分が誰かを明かす人々、それぞれにかけがえのないユニークさをもつ斯く斯く然々の者たちである。第四に、両者とも救いの拠点を光の領域に求めるが、ハイデガーにとってその領域は、現出する存在者とは存在論的に区別された存在の明るみであるのに対し、アーレントにとっては、複数の人々によって見られ聞かれる輝かしい現れの間である。そして第五に、ハイデガーの場合、光と闇はやがて交錯や反転を繰り返すようになるが、アーレントは、公的な光の領域と私的な闇の領域との間に一線を画し、人々が一線を越えないことを求める。

アーレントが見出すのは、公的な場での言論と活動で涵養され発揮される「判断力」である。これは、意志とも思考とも異なる天与の精神力である (cf., LM1: 69)。判断は、カントが洞察したように、「趣味 (taste; 味覚) のセンス」(LK: 64) に基礎づけられている。常識からすると、美醜や味覚など趣味判断は主観的と思われるため、アーレントもまたヒューマニズムに舞い戻ったかに見えるが、実は、趣味は議論でき、涵養でき、合意を形成できる「間主観的」な「共通感覚」である (cf., LK: 76, 71)。主観的な判断から共通感覚としての判断へと涵養されるためには、「利害関心」と「党派性」から解放され、あらゆる人々の立場を考慮できるようになる必要がある (cf., LK: 68, 73)。

本発表では、この趣味判断の領域を、真理と美、芸術と文化、天才と住民、哲学と政治が交叉する問題圏として検討し、近代的人間の故郷喪失を超えるアーレントの方途を、ハイデガーと対照させつつ示したい。

引用文献

- Arendt, H. 1969: *Crises of the Republic*, Harcourt Brace & Company. [CR]
- Arendt, H. 1978: *The Life of the Mind, One / Thinking, Two / Willing*, One-volume Edition, A Harvest Book. [LM1] / [LM2]
- Arendt, H. 1992: *Lectures on Kant's Political Philosophy*, edited and with an interpretive essay by Ronald Beiner, The University of Chicago Press. [LK]
- Comenius, J. A. 1660: *Pampaedia*, Lateinischer Text und deutschen Übersetzung, Quelle & Meyer, Heidelberg.
- Heidegger, M. 1976: *Wegmarken*, Gesamtausgabe Band 9, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main. [GA9]

ハイデガー・フォーラム第12回大会

応募発表要旨 3

(統一テーマ：ヒューマニズムについて/を越えて)

ハイデガー〈と〉「人間らしい人間の人間性 (humanitas des homo humanus)」 の在り処

西田幾多郎 (1870 - 1945) の後期思索が展開する渦中からの一論稿『人間的存在』(1938年)の末部の方では、「【西欧】近世の内在的人間中心主義」(旧全集版 第IX巻 63頁)がその歴史的世界の弁証法的進展に含み込まれた段階位相として極限に至る事態として、「絶対の鉄壁に当たる」(同 56頁)という西田独自の表現の下で開陳・敷衍される。それは又、ヨーロッパのラテン中世との連関では、「教権を離れて人間が人間に還った人間中心の人間主義」(同 61頁)とも表明されている。西田最晩年の遺稿となった『場所的論理と宗教的世界観』(1945年2月脱稿)の末部でも、文芸復興(ルネッサンス)以来のヨーロッパのヒューマニズムが自律化を進展せしめ、人間はどこまでも非宗教的に、世界は脱宗教的になってゆくプロセスの進行したことが考察されている(第XI巻 460頁以下)。— ハイデガーがかの『ヒューマニズム書簡』(Über den «Humanismus», Brief an Jean Beaufret, Paris)を書き記した1946年末頃のドイツの思想状況と言え、同時期における西田の精神史的診断とも呼応して、「絶対の鉄壁に当たる」根本経験を経た大戦後の新しい開拓の模索を促すものであったと言えよう。但しハイデガーの思惟の道においては、ただ何らかの発意による新しい企て(Entwurf)といったものからは思索の言葉は生まれることなく⁽¹⁾、従って思考実験もどきの〈思惟の転向〉は移行的思惟において本質現成するものに属するものでもない⁽²⁾。

そこで本発表では、先ず(1)『ヒューマニズム書簡』がその起草された歴史的世界状況において、(このテキストでは明示的に主題化されないまま)「自ら振動している領域、〔自性〕性起(Ereignis)」⁽³⁾から — この時点で尚も — ヒューマニズム(という、西洋的伝統の歴史的負荷を何重にも負う主導的な)語《について》未だ既在的な形而上学の言語構造に浸潤されつつも何を語り得ているのかを問う。然るにその上でまた、そこでの語りがヒューマニズム《を越えて》如何なる思考圏への突入(Eingang)において — 第二次大戦後のハイデガーの、1940代後半の思索境涯の段階で — どのように〈思惟それ自体〈の〉境域(Element)〉の究明を追・遂行(nach-vollziehen)し得ているかを問題化してみたい。

続いて(Ⅱ)ハイデガーの〈思惟の道〉からの決定的刻印の下に、その影響思想圏の20世紀後半以降の展開の診断という遠大な課題において、ここでは「ヒューマニズムを《巡って》の脱・形而上学的思考動向」という、限定されてはいるが極めて本質的な問題脈絡を継承／発展せしめた三人の哲学者の特徴的な思想の軌跡を描き出す。

a) 後期ハイデガーの思索圏から、非而上学的倫理の可能性は如何に問われるべきか (Werner Marx, 1910 – 1994)。

b) 後期ハイデガーの〈住まう〉ことの思索の発展路線 (〈風景的思考〉: Ute Guzzoni, 1934)

c) ハンス・ヨナス (Hans Jonas, 1903 - 1993) — 西欧近代の〈人間中心主義 (Anthropozentrismus)〉を超克するヒューマニズム? ハイデガーの思考要因からの影響作用史?

無論、これら三つの方向へと放射される思考連関の各々を詳細に究明し尽くすことを企図するのではなく、問題の次元を掘り起こすための消尽線を描き出すことに終始したい。その際に、中・後期のハイデガーの思惟の道〈と〉「尺度賦与 (Maßgabe)」との根源的関連が問い直されることになるろう。

最後に、(Ⅲ)『哲学への寄与論稿』(1936年 - 1938年)で試みられた移行的思惟の歴史からの見取り図 (Grundriß: 根柢亀裂) に於ける六つの接合条理 (Fuge) の内で、五番目の〈【現・存在 (Da-sein) の】基づけ (Gründung)〉へと帰向し、その思惟の布置からの照射を試みる。そこでは、『ヒューマニズム書簡』でも述べられ、思考がその本来の境域に立ち返るとされる「【聴き従う】帰属性 (Zugehörigkeit)」が「内立性 (Inständlichkeit)」 — 内立的脱自としての脱自的・実存 (Ek-sistenz) — と共に語られるが、ここでの思索連関を特に明らかにしたい。

(1) Cf. M. Heidegger, Brief über den Humanismus, in : GA 9, S. 327.

(2) Ders., Beiträge zur Philosophie, GA 65, S. 262.

(3) Ders., Der Satz der Identität, in : GA 11, S. 46.

ハイデガー・フォーラム第12回大会

応募発表要旨4

(統一テーマ：ヒューマニズムについて/を越えて)

アンチ・ヒューマニズムについて/を超えて ——ハイデガーのユンガー（無）理解——

ヒューマニズムの観点からマルティン・ハイデガーを論ずるとき、本人がヒューマニズムの名を挙げて自身の立場との差異について弁じている『「ヒューマニズム」についての書簡』（1947年、GA9）のようなテキストの読解と並行して、同時代の反ヒューマニズム的な諸思想への具体的な取り組みを理解することが不可欠である。これらの反ヒューマニズム思潮は、戦後すぐにアルミン・モーラーによって「保守革命」と概括され、もろもろの「人間」的価値を掲げるフランス革命への対抗革命という一貫した視点から整理が行われた。そして、ハイデガーもまた「保守革命」の圏域に属する哲学者とされるのである（Armin Mohler, *Die konservative Revolution in Deutschland 1918-1932. Ein Handbuch*, 3. Aufl., Darmstadt 1989、初版は1950年）。

これらの取り組みのなかでも、質量ともに最も大きな存在といえるのは、エルンスト・ユンガー（1895年～1998年）に対するものである。ハイデガーは、ユンガーがみずからの記念論文集に寄せたエッセイ「線を越えて」（1950年）への応答のかたちで「存在の問いへ」（1955年、GA9）を著しており、ほかにも戦後の小品ではしばしばユンガーへの言及が見られる（1953年の「形而上学の超克」、GA7など）。死後には、ユンガーについての覚書が『エルンスト・ユンガーへ』（2004年、GA90）のかたちで刊行され、また二人の往復書簡も公表された（2008年）。

とはいえ、ハイデガーとユンガーの関係のなかには大きな非対称性が横たわっていることも見逃し得ない。これは主に、二人の「対決」が、ほぼハイデガーがユンガーを論ずるという一方的なかたちでのみ残されていることに起因する。そこから生ずるのは、以下の二点の問いである。（1）ハイデガーのユンガー理解は妥当なのか。あるいは、少なくとも、ハイデガー特有の思索の癖によって、ある方向に誘導するものとなっていないか。（2）ハイデガーの、特に戦後の著作のなかには、本人がユンガーを読解する過程で得られたモチーフが隠されているのではないか。また、それらが継承されるなかで、まったくハイデガー的な変奏が施されているのではないか。

本発表は、以上の論点を念頭に置きつつ、ハイデガーとユンガーの緊張に満ちた、にも

かかわらずいまだに不明瞭な対話の解剖を試みる。全体構成は以下の通りとする。

1. ニーチェと形而上学をめぐって

ハイデガーのユンガーに対する基本的な見方は、ユンガーをニーチェによって達成された方向性をさらに推し進めた思想家として規定するものであった。すなわち、『ニーチェ』(1961年、GA6)などの著作や講義で示される、ニーチェ＝西洋の形而上学の完成者の延長にユンガーを位置づけ、それに付随する要素のうち特にニヒリズムと「力への意志」を20世紀の現実のなかで展開する思想家として論ずるわけである。このような態度は、「存在の問いへ」でも、また『エルンスト・ユンガーへ』所収のノートのなかでも、常に一貫している。

他方、ユンガーにとってもニーチェは決定的な参照先であった。終生にわたって書き続けた日記にニーチェ読解に関わる個所が散見されるのみならず、「内的体験としての戦闘」(1922年)、『冒険心』(1929年／1938年)、『労働者』(1933年)といった戦間期の代表的著作から、「線を越えて」(前述)や『森を行く者』(1951年)など戦後の作品にいたるまで、ニーチェ的モチーフは枢要な位置を占め、しかもニヒリズムと「力への意志」が最有力の主題となっている。ここでは、こうしたユンガーのニーチェへの取り組みから逆照射することで、同じくニーチェを手がかりとしたハイデガーのユンガー読解が持たされている特徴的な偏差を見極めたい。

2. ユンガー的概念の変奏について

上述のごとく、ハイデガーは、ユンガーをみずからにとって克服すべき形而上学のなかに固定しようと努める一方で、戦後の自分の思索のある部分の契機がユンガーであることを認めてもいる(「存在の問いへ」)。今日では、そのような影響関係は主に、「技術への問い」(GA7)に結実する、技術をめぐってのものであると目されている。ここで看過し得ないのは、その時期のハイデガーが、技術およびその系としての芸術についての思索を展開する過程で、戦間期のユンガーが独自の意味づけを施して使用していた用語を、敢えてそのまま登場させていることである。具体的には、「苦痛」(1950年の「言葉」、GA12、あるいは前述「形而上学の超克」)、「惑星／惑星的」(「形而上学の超克」)、および「集立(Ge-stell)」と関連づけられて引き合いに出される「形態」(1950年の「芸術作品の根源」、GA5)である。これらのユンガー的概念に即し、ハイデガーがその技術論を継承、再編する際に行った文脈の組み替えに注目することで、1とは別方向からハイデガーのユンガー読解の独特の方向性を検討しようとする。

ハイデガー・フォーラム第 12 回大会

応募発表要旨 5

(統一テーマ：ヒューマニズムについて/を越えて)

哲学的解釈学におけるフマニスムスの位置 ——ハイデガーとガダマーの間隙——

フマニスムスは人間を人間足らしめるものを規定するに当たって存在と人間の本質との関係を問わないだけではない。フマニスムスはこの問いを妨害しさえもする。というのも、フマニスムスは存在と人間の本質の関係に対するこの問いを、自らの出自である形而上学ゆえに知ることも理解することもないからである。

M. Heidegger, *Brief über den>Humanismus<*

ドイツ古典の精神的後継者として、むしろ精神諸科学はフマニスムスの代弁者であるという誇り高い自己意識を発展させた。(…) ビルドゥングの概念は、(…) 18 世紀の全くもって巨大な思想であったし、また 19 世紀の精神諸科学が生きる契機を言い当てている。このことは、精神諸科学がこの概念を認識論的に正当化することができないとしても覆されえない。

H.-G. Gadamer, *Wahrheit und Methode*

本発表の目的は、ガダマーの哲学的解釈学におけるフマニスムスの位置付けを明らかにすることである。この視座から彼の師であるハイデガーとガダマーの思想内実における具体的な差異を可視化することを目指す。浩瀚なガダマー伝で知られるジャン・グロンダンが指摘する通り、ガダマーとハイデガーの差異を彼自身の言説から読み取ることは容易ではない。というのも、主著『真理と方法』において、ガダマーはシュライアマハーやディルタイといった解釈学の先達に対して極めて批判的な立場を取る一方、師であるハイデガーに対してはそのような態度を取らないからである。これはガダマーの一種の戦略であり、ディルタイ以前の伝統的解釈学に対してハイデガー並びに私ガダマーは解釈学の存在論的次元という新たな局面を開いた、ということ強調するためである。この態度は著作集第 10 巻に「ハイデガーを偲ぶ」という枠でまとめられた諸論文の一群においても基本的に変わらない。

だがこの両者に差異がないかと問われれば、断じて否と答えるべきである。ガダマーはハイデガーの垂流哲学者ではない——このことが承認されない限り、ガダマー研究などは

無駄である。しかし『真理と方法』は今なお現代の「古典」として読みつがれ、「解釈学」という潮流の基底を為している。ここにはハイデガーとは異なる思想の類型があると考えられる。そのことを明らかにすることは後世の研究の責務であろう。

本発表ではこの両者の差異を統一テーマの主題である「フマニスムス」に求めたい。先のグロンダンもまた、この両者の差異をフマニスムスに求める。その上で、「解釈学は一貫してフマニスムスである」とさえ述べている。本発表においては、これをより先鋭化した形で「哲学的解釈学の本質はフマニスムスである」という主張を立てたい。この哲学的解釈学の本質をなす「フマニスム」とは具体的にいかなるものであるのか、これを明らかにするのが本発表の目的である。

両者の対立は上の引用から明らかである。ハイデガーはたとえば全集 18 巻所収の 24 年講義においてフマニスムスの重要概念である「レトリック」を積極的に取り上げている一方、通称『ヒューマニズム書簡』においては自身の形而上学批判の立場からフマニスムスを徹底的に攻撃する。他方精神科学的真理の正当性の擁護を企図するガダマーは、その淵源をフマニスムスに見て取りこれを肯定的に評価し、自らの哲学的解釈学の出発点に据える。

この両者がフマニスムスと呼ぶものは、だが内実として相当異なるものなのではないかというのが本発表の見通しである。つまり、ハイデガーが形而上学の伝統に属するとして批判するフマニスムスに対して、ガダマーは「新人文主義」ないし「ドイツ人文主義」の流れに棹さずフマニスムスを重視すると考えられるのである。

このことを背景に、本発表においてはまずハイデガーのフマニスム批判を敷衍した上で、両者の差異を際立たせるために彼らのヘルダー解釈に着目したい。両者の違いを端的に述べるならば、ハイデガーはヘルダーをフマニスムスの文脈から切り離し、自らの「存在史」という構想に取り込もうとするのに対し、ガダマーはあくまでヘルダーをフマニスムスの伝統の中から解釈しようとする。そして、前者の関心が主に言語に向かうのに対し、後者の関心は歴史とフマニテートへと向かう。ガダマーのヘルダーへの関心が『真理と方法』の出発点を為すビルドゥングへと連なっていることは明らかである。ガダマーとヘルダーの関係はこれまでほとんど取り上げられることはなかったが、彼はヘルダーの中に驚くほど自らの哲学的解釈学との親近性を見ている。この内実を明らかにすることで、上の「哲学的解釈学の本質はフマニスムスである」という主張の妥当性が吟味される。この主張を確証することで、ハイデガーとガダマーの差異をこれまでとは違う光の下で浮かび上がらせることが本発表の目的である。

ハイデガー・フォーラム第12回大会

応募発表要旨 6

(統一テーマ：ヒューマニズムについて/を越えて)

人間主義と形而上学

——人間性をめぐるハイデガーとレヴィナスの対決——

ヒューマニズム、あるいは人間中心主義への批判は、途切れることなく続いている。例えば、ある属性をもつものを「人間」として認めることは、その反面で、当の属性をもたないものを「人間」という集団から排除することを含んでおり、人間中心主義は「人間」として認められない集団（重度障害者、動物、自然）の「非人間化」や「人間のための使用」と一体をなしている、といった批判がすぐさま思い起こされる。こうした批判を浴びることが予想されるなかで、今日なお人間の人間性について哲学的に思考すること、さらには「人間主義」（ヒューマニズム）という立場をあえて引き受けることにはいかなる意味があるのだろうか。

本発表は、このような問いをハイデガーと共に思考することを試みる。というのも、ハイデガーこそ、近代の人間主義を誰よりも厳しく批判しただけでなく、人間の人間性について従来とは異なる仕方でも思考しようとした哲学者であるからだ。実際、ハイデガーは『ニーチェ』講義や「ヒューマニズムについて」（1947年）で、「理性的動物」や「外的世界を表象する主観」として人間を規定する形而上学的な人間理解が、理性や主観性についての存在論的な問いを看過していると批判する一方で、「ヒューマニズムに反対して思索がなされる理由は、ヒューマニズムが、人間の人間性（*humanitas*）を、十分に高く評価していないからなのである」（「ヒューマニズムについて」）とまで述べている。つまり、ハイデガーは単純な反人間主義に与しているのではなく、形而上学的な人間主義の前提を問い直すことで人間の人間性をまったく新たな仕方でも思考することを試みたのだ。このような試みは、二重の意味で革新的であったし、今日でもなお革新的であり続けている。第一に、それは存在者の特定の能力や属性によって人間を規定しようとする（逆にそのような能力・属性をもたない存在者を人間という集団から排除する）類の人間主義から手を切っている——このこと自体は、ハイデガーの批判対象であったサルトルのヒューマニズムにもすでに見てとられる。第二に、サルトルもまた暗黙の前提としていた、人間を能動的な行為主体とみなす人間理解から出発することを拒んでいる。ところが、ハイデガーの思考の抽象度の高さゆえに、以上のようなハイデガーの新たな試みが、人間についてのいかなる描像

に至り、人間をめぐる倫理的な議論等にかなる具体的な展望をもたらすのかについては、それほど明瞭にはなっていない。本発表は、「ヒューマニズムについて」をはじめとするハイデガーの諸論考の読解や、主としてフランスにおけるハイデガー的思考の継承者 (cf. D. Janicaud, *L'homme va-t-il dépasser l'humain ?*, 2002; F. Dastur, *La mort. Essai sur la finitude*, 2007) の解釈を通じて、人間性をめぐるハイデガーの思考に具体的な肉づけを与えることを試みる。これが本発表の第一の課題となる。

第二の課題は、このようにして取り出されたハイデガーの人間性についての思考を、レヴィナスのそれと比較することで批判的に考察し直すことである。一方で、レヴィナスは、先述したハイデガーにおける形而上学的な人間主義への批判と人間性の再考を最大限評価し、「人間主義は、それが十分に人間的でないという理由においてのみ、告発されねばならない」(『存在するとは別の仕方』) と述べている。他方彼は、主として『他なる人間の人間主義』(1972年) に収録されることになる諸論考において、ハイデガーの人間性についての思考との全面的対決を試みる。そこで争点となるのは、理性(ロゴス)と主体性についてのハイデガーの理解である。レヴィナスは、形而上学的な人間主義において問題となった理性と主体性という二つの概念を、存在との係わりにおいて捉え直すハイデガーとは異なる形で再考することで、非存在論的な「他なる人間の人間主義」——存在者の能力や属性から人間を規定することを拒みつつ、社会においてなされている他人との係わりから「人間性」をある意味では「構築」することを目指す思考——を提起する。本発表は、論考「人間主義と無起源」(1968年)等の検討を通じて、人間性をめぐるレヴィナスによるハイデガーとの対決を再構成し、レヴィナスの人間主義がいかなる点で形而上学的人間主義と異なるのかに応え、この新たな人間主義の哲学的意義を具体的に解明することを目指す。最終的には、ハイデガーとレヴィナスにおける「形而上学」の意味の相違と、両者における「人間主義」と「形而上学」との関係が問題となることだろう。

ハイデガー・フォーラム第12回大会

応募発表要旨7

(特集：ドイツ古典哲学)

感性と悟性の共通の根

——ハイデガー『カントと形而上学の問題』とカント『判断力批判』の交差点

発表要旨：

ハイデガーの『カントと形而上学の問題』(以下「カント書」と略記)は、カント哲学を超越論的構想力および超越論的図式論を中心に据えて捉え直す、画期的なものであった。しかし、感性と悟性の共通の根を超越論的構想力に求め、その超越論的構想力に由来する悟性を理性と同一視することを主張するカント書の読解は、カントにおける理性の統一的役割を構想力に移し替えてしまう強引さを持っており、その点でカント哲学の建築学に根本的に反する危険を孕んでいた。そのことは、この書が超越論的理想を超越論的構想力の産物として捉えるときに、より鮮明となる。

本発表の目的は、カント書が示した、超越論的構想力を悟性と感性の隠された共通の根とする読解を、『純粹理性批判』とではなく、むしろ『判断力批判』と対照させて再考察することによって、この解釈が持ちうる新たな可能性を探究することにある。

知られているように、カントの『純粹理性批判』は、ヒュームの経験論によって、客観的必然性を持たない単なる習慣的原理であるとされた因果律を、ア・プリオリな原理として救うことを一つの動機として書かれた。そのためにカントは、ア・プリオリな総合判断が可能であることを主張し、このような判断が可能となる仕組みを提示した。さて、このための説明装置として重要な役割を果たしたのが、超越論的図式論であった。というのも、カントにおいて、認識は直観と思考の結合であり、ア・プリオリな総合判断は、まずは純粹直観と純粹思考の結合として捉えることができるからである。図式は概念と直観の媒介者であり、超越論的図式論のみが、純粹直観と純粹悟性概念との結合がいかにして可能であるかを説明することができる。

カント書の斬新さは、この超越論的図式論を介して可能となるア・プリオリな総合判断を、存在論的認識として提示したことにあつた。その読解を提示すべく、ハイデガーは、知られているように、総合の働きを構想力に基ける『純粹理性批判』第一版のカテゴリーの超越論的演繹に依拠し、総合の働きを悟性に帰す第二版は第一版に対する後退であるとの説を提示した。

さて、この説は後年のハイデガーのカント読解においては大きく修正をこうむることに

なるとはいえ、ハイデガーがカント書において、理性の働きを超越論的構想力に帰す強引な読解を敢えて推し進めたことの意義は、『ニーチェ』においてはじめて明らかになるように思われる。なぜなら、ここでこそハイデガーは、理性は構想力そのものであると宣言するからである。

この『ニーチェ』においてハイデガーが言及しているのが、カント『判断力批判』にほかならない。たとえここでのハイデガーの『判断力批判』言及がかなり限定的なものであるとしても、ハイデガーがニーチェの語る「図式化」や「カテゴリー」という語彙に着目するとき、彼の念頭にあるのは、明らかにカントの図式やカテゴリーである。ただし、ハイデガーの議論の前提になっているのが、あくまでも『純粹理性批判』における、概念を前提とする規定的判断の図式であるのに対して、我々はむしろ、ここでのハイデガーの議論を、『判断力批判』が語る、反省的判断における概念なき図式化にこそ、重ね合わせることを試みる。なぜなら、ハイデガーがニーチェの芸術をめぐる格言を考察するとき、そこではもはや認識は問題となっておらず、美の経験こそが問題となっているからである。

この『判断力批判』こそ、『純粹理性批判』が明言していなかった、感性と悟性の共通の根について、一つの可能な答えを与えてくれるように思われる書物である。なぜなら、美的＝直感的判断が問題となる時、認識の場合におけるような感性と悟性の分断はもはや消滅するからである。美的＝直感的判断は判断である以上、悟性の働きであるが、同時に感性の働きでもある。ここでこそ、感性と悟性の共通の根として構想力を語るハイデガーの説が、説得力のあるものとなるように思われる。

さらに、『判断力批判』においては、理性理念の対としての美的＝直感的理念、すなわち、超越論的理想の対であるような美的＝直感的理想が語られる。この理想は、認識の対象ではそもそもなく、それが真であるか仮象であるかということは、問題とならない。この議論において初めて、超越論的理想を超越論的構想力の産物であるとするハイデガーの説が、意味をもちうるものとなる解釈の道が開けるのである。

このような解釈に基づくならば、ハイデガーが目指すのは、もはや一般的概念によって説明可能な存在についての「学」(存在論)ではないことになる。語られるべきはおそらく、概念化されえない存在の運動そのものとの、カテゴリーなき出会いなのである。

ハイデガー・フォーラム第 12 回大会

応募発表要旨 8

(特集：ドイツ古典哲学)

ハイデガーと超越論的哲学の行方

—ハイデガーの「可能性」および「自由」概念と「ドイツ古典哲学」—

(本発表の問題設定と目的)

本発表は、マルティン・ハイデガーにおける「超越論的哲学」の独自の展開が持つ意義と射程を、「ドイツ古典哲学」の「反復／取り戻し」、すなわち、両者の「近さと隔たり」という観点から明らかにするものである。本発表は、大別して、以下のふたつの目的を持つ。(目的 1) ハイデガーの『カントと形而上学の問題』等で提唱される「現存在の形而上学」の内実、およびその土台を提供する彼のカント解釈を検討することで、同時期のハイデガーにおける「形而上学の基礎づけ」としての「超越論的哲学」の構想の射程と限界を、あくまで同構想に対して内在的な仕方で画定する。その際、本発表は、この構想が最終的には放棄されることとなる内在的な理由を、「現存在の形而上学」の構想そのものを形作る「可能性」および「(形而上学的)自由」概念に求め、その理由を明らかにする。(目的 2) ハイデガーの「超越論的哲学」の構想の独自性の核が、一方で彼独自の「現象学」的立場、他方で(『存在と時間』で課題として定式化された限りでの)「存在の問い」に求められる点を明瞭にしたうえで、その鍵としてのハイデガーの「可能性」および「自由」概念と「ドイツ古典哲学」の「近さと隔たり」を解明する。

(本発表の概要) 本発表は、上記の目的を、以下の作業を通じて達成することを目指す。

(第一節) まず、ハイデガーにおける「超越論的哲学」の理念を規定する為に、彼の「現存在の形而上学」の構想および、その着想の地盤として機能している同時期の彼のカント解釈が概観される。その最大の特徴は、ハイデガーが、「形而上学の基礎づけ」としての「超越論的哲学／批判哲学」というカントの着想を、「現存在」とその「可能性」という独自の観点から「反復／取り戻し」している点に求められる。

(第二節) ハイデガーは、自身のカント読解を「現象学的カント解釈」と特徴付ける。その意義と射程を明瞭にする為に、ハイデガーの独自性が、フッサールとフィンクスの「現象学的カント解釈」との対照を通じて簡潔に示される。この作業を通

じて、ハイデガー自身の「超越論的哲学」の理念に内在的な問題設定および困難が、彼の「現象学的方法」および「存在の問い」に由来する（という、一見あまりにトリヴィアルな）事実が示される。

（第三節） 前節までの成果を受けて、ハイデガーの「超越論的哲学」に固有の困難が、具体的には、その「可能性」と「自由」概念に起因することが明らかにされる。その困難とは、「世界」という「可能性」（「自由」）そのものの「遊動空間」と、「世界形成的」に「超越」する（各自的な）「現存在」自身に固有な「可能性」（「自由」）のあいだに容易には架橋できない齟齬が生じている点に求められ、この困難を示す端的な表題として「存在論的差異」が検討される。

（第四節） 周知のように、ハイデガーは、1930年代中盤以降、哲学的「世界」概念の持つ（近代）形而上学的性格の検討（公刊著作では、『芸術作品の根源』、『世界像の時代』等）、「現存在」の地位に関する見直し（『ヒューマニズム書簡』等）、そして、「時間」概念の根本的な転倒（講演「時間と存在」等）といった作業に没頭する。本発表の立場からすると、これらの作業は、自身の「超越論的哲学」への壮大な自己批判、あるいは批判的展開（かつ「転回」）として理解できる。

しかし、本発表はその問題設定からして、あくまで上の事実の「手前」（すなわち「現存在の形而上学」の構想に内在的観点）から、ハイデガーの「超越論的哲学の行方」を「ドイツ古典哲学」の「反復／取り戻し」として素描することを目指す。その際、30年代中盤のハイデガーが、シェリングの「自由」概念に着目している点が手掛とされる。というのは、この事実は、ハイデガーが、自身の「可能性」と「自由」概念が抱える困難からの出口を一もはやカントではなく—シェリングに探ろうとしているものと解釈できるからである。このように、ハイデガーの「超越論的哲学の行方」は、（カントからシェリングに至る）「ドイツ古典哲学」の「反復／取り戻し」という観点から捉えることができる（ハイデガーと「ドイツ古典哲学」の「近さ」）。

（結語） とはいえ、このような「ドイツ古典哲学」の「反復／取り戻し」作業は、単なる「繰り返し」ではあり得ない以上、両者の断絶が併せて解明されるべきである。この問いに対して本発表は、既述の理由から、あくまで同時期のハイデガー自身の「超越論的哲学」の構想に内在的な観点から回答を与えることを試みる。すなわち、ハイデガーの（「現象学的」に「存在の問い」を展開しようとする）「超越論的哲学」の構想の核に位置する彼の「可能性」および「自由」概念と「ドイツ古典哲学」の断絶が検討される（ハイデガーと「ドイツ古典哲学」の「隔たり」）。

ハイデガー・フォーラム第 12 回大会

応募発表要旨 9

(特集：ドイツ古典哲学)

ハイデガーのシェリング解釈について

ハイデガーとシェリング。この両者の関係、具体的にはハイデガーによるシェリングの『人間的自由の本質とこれに関連する諸対象に関する哲学的研究 (*Philosophische Untersuchung über das Wesen der menschlichen Freiheit und die damit zusammenhängenden Gegenständen*)』(1809)に関する 1936 年夏学期講義と 1941 年夏学期講義(『シェリングの『人間的自由の本質について (*Vom Wesen der menschlichen Freiheit*)』)』) 解釈をめぐる研究は国の内外を問わずこれまでたびたび試みられてきた。それは就中前者の講義が、重要テキスト『哲学への寄与』(1936-38)との成立時期の近さからハイデガーの後期思索へのシェリングの積極的な影響関係を明確化できるのではないかという希望を抱かせるからである。しかしながら同時につきのようなハイデガーの解釈とシェリング自身の自己理解の重大な差異が指摘されつづけてもきたことも知られている。シェリングが「無底 *Ungrund*」を『自由論』の「研究全体の頂点」(SW 7, 406)とみならずにもかかわらず、ハイデガーはこれに特段の主題的論及をほどこすことなくむしろ「根底 *Grund*」と「顕存 *Existenz*」の「区別」に『自由論』の核心部を見定めようとしているということである(この相違を最も深くかつ鋭く剔抉した研究者として日本の大橋良介(「シェリングの無底と体系——ハイデッガーの解釈との対決」)が挙げられる)。本発表の目的は、こうした従来の研究が示した両哲学者の布置をいまいちど改めて問いなおすこと、あるいはそのための新たな眺望を切り拓くことにほかならない。

まず 1936 年講義におけるそもそものハイデガーの解釈の特徴及び意図を再確認する。ハイデガーは、『自由論』を人間的自由の本質に〈関する *über*〉ものではなく、その本質に〈ついで *von*〉ものと解釈する。ここでの思索は自由のものである——自由に属するものである。これは同講義の冒頭で示される「指標命題：自由は人間の特徴ではなく、人間が自由のものである (*Merksatz: Freiheit nicht Eigenschaft des Menschen, sondern: Mensch Eigentum der Freiheit*)」(GA 42: 15)に対応する。ここに示されているのは、人間が自由 (*libertas*) をもつとするヒューマニズムの転倒にほかならない。人間に属する自由ではなく、人間がそこに属する自由こそ問題なのだ。これを踏まえて、シェリング解釈における「直接的な意図」(GA 42, 6)の説明も読まれなければならない。曰く、その

意図とは、「人間的自由の本質と、それゆえ自由への問いを把握することである。これによって哲学の最内奥の中心 *die innerste Mitte* が知へもたらされる」(GA 42, 6)。問われているのは、自由の本質であり、これは「哲学の最内奥の中心」である。ハイデガーが『自由論』の核心と見なすのは、この自由、最内奥の「中心」である。この「中心」はここでは単に慣用的言い回しと見なしてはならない。そこに人間が帰属する「中心」というある種の場所に 20 年代のハイデガーがすでに注目していたことは H.-G.ガダマー(1900-2002)の証言から知られる。Ph.シュヴァープらの検証によれば 1927/28 年冬学期(ガダマー自身の記憶よれば 1925 年)の「ある日、彼 [=ハイデガー] はシェリング・ゼミナールでその一文を読み上げた。「生それ自身の不安は人間を中心から追い立てる」[SW 7, 381]。そして言った、「深さにおいてこの一文に比肩しうるヘーゲルの文章をただのひとつでもわたしに挙げてみたまえ！」と」(Gadamer)。大橋も述べるように、『自由論』のなかで「中心」と「周辺」の語群と最も緊密な仕方で登場する名前は F.バーダー(1765-1841)であり、その場合、彼を通じた J.ベーム(1575-1624)が問題となる。この場合「中心」と「無底」は、バーダーを介したベームの神智学、キリスト教からの影響のうちに見定められることとなる。キリスト教がハイデガーの由来のひとつであることはたしかである。また最初期ハイデガーはキリスト教的生経験に論究してもいる。しかしその際に問題だったのはキリスト教の神や三位一体などの神学問題ではなく、生(の事実性)であった。なにより『存在と時間』直後のハイデガーはすでにキリスト教から単に遠ざかっていたのみならず、形而上学構想を通してギリシアへ向かう別の道を本格的に歩み始めていた。ベームがギリシアとまったく無関係かは別として、少なくとも彼によって示される方向をハイデガーが迂遠な路と判断するのは当然である。ハイデガーの「中心」の語への注目が示すのは、大橋が(バーダーを介した)ベームからの影響と見なす「中心」の問題のうちにハイデガーはキリスト教・神智学ではなく、むしろギリシアを見ていたということである。本発表ではこうした事情を踏まえたうえで、ハイデガーがシェリング解釈の背景として持しながらも、かならずしも際立った仕方で強調しないギリシア的背景をこちら側で殊更に展開する。これによりハイデガーのシェリング解釈の隠された背景を明示し、そのハイデガーの行ったシェリング解釈及びシェリングに関する研究のための新たな視点を拓くことを狙う。